



Title	世紀転換期における「他者」表象の技法：1903年第五回内国勧業博覧会を中心に
Author(s)	松田, 京子
Citation	大阪大学, 1997, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/40118
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	まつ だ きょう こ 松 田 京 子
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 12898 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 9 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科日本学専攻
学 位 论 文 名	世紀転換期における「他者」表象の技法——1903年第五回内国勧業博覧会を中心に——
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 広田 昌希
	(副査) 教 授 小松 和彦 助教授 杉原 達

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、19世紀から20世紀への世紀転換期に大阪で開かれた第五回内国勧業博覧会において、日本人にとっての「他者」がどのような技法で表象されたか、それはどのような政治性をもったのかを、具体的に明らかにしようとするものである。世紀転換期とは日本が帝国主義段階へ移行していく時期のことであり、表象の技法とは博覧会の建造物や展示のされ方をいい、この時期に日本人が「他者」（異文化をもった存在）をどのような技法で表象したかをさぐることによって、日本人自身の自己像あるいはアイデンティティのありかたを明らかにすることにもなるという。

本論文は、序章、本文5章、終章からなり、約15万字、四百字詰原稿用紙で375枚に相当する。

序章では、問題意識と方法的枠組が示される。すなわち「異文化」（他者）の表象がオリエンタリズムに収斂される危険と、「自文化」の表象が排他的ナショナリズムに収斂される危険を指摘しつつ、文化を表象することの政治性を明らかにすることの必要性を説き、この時期に日本帝国臣民というナショナル・アイデンティティが形成される問題を、博覧会における「他者」表象のありかたとそれを支える知のありかたを分析することによって、明らかにしたいとする。これまでの研究史を整理して、オリエンタリズムやアイデンティティに関する従来の研究は言説の分析が主であったが、ここでは博覧会という具体的な場の分析を通じて、言説と実際の場との関係を問うとする。また、博覧会研究の諸潮流の中では社会史的アプローチの潮流に属するが、そこで最大の成果を示している吉見俊哉氏の研究を、博覧会を「近代」の問題として欧米との共時的な性格の抽出という点で学ぶべきだが、「帝国主義」の問題としてとらえる所が弱く、博覧会の展示の具体的分析、展示とそれを支える知との関係については欠ける点があるとした上で、本論文は、それらの点から検討したいという。すなわち、①博覧会での「展示」にみられる「他者」のありかたとその解釈をめぐる問題、②「展示」による「他者」表象のありかたと、それを支えた知（知識人の思考様式）との関連の問題に焦点を当てて考察するとする。

第1章「博覧会という『場』——第五回内国勧業博覧会と大阪」では、第1節で1887年に始まった内国勧業博覧会の歴史の中に第五回を位置づけ、第四回までは国内向けの経済博覧会であったが第五回は万国博であり国家の威光を世界に示す帝国の博覧会であったと特徴づけ、第2節で博覧会が大阪という都市のどういう空間に設置されたかを、道路拡張と貧民街強制移転を中心に分析して、均質で衛生的な「場」の中に博覧会がつくられたことを論証、第3節では、博覧会が均質な空間に対して異質な姿をもって出現したこと、会場の構成が①国内各府県の出品物の展示館、②諸外国から出品の参考館、③それらと異なる台湾館と学術人類館という三つからなるとして、「他者」表象が典

型的に示された③の問題をとりあげるとする。

第2章「植民地パビリオン台湾館」では、台湾館が日本博覧会史上初の植民地パビリオンであり、他のパビリオンが府県単位でなく農業館・工業館といった分野別につくられたのに対し、それだけ独立する形で台湾全体が縮小して展示され、その展示の技法は「内地」の産業を基準とした分類のもとに整理・配列されていて、台湾が遅れた土地として表象されること、しかし文明人たる日本人の指導で文明化される可能性をもった土地とも表象されること、先住民を日本人との人種的相違性で示し、日常生活や風俗の展示で文化の差異性を強調していること、台湾侵征戦争の象徴である篤慶堂の移築など「征服地」としての歴史を語っていることなどを分析し、さらにこれらの展示が人々にどのように見られたかを新聞記事から析出、「帝国の宝庫」という台湾認識が一般化されようとしたことを論証する。

第3章「調査・収集という知——台湾旧慣調査と伊能嘉矩」では、台湾館の展示を支えた知の性格と構造を明らかにする。旧慣調査は、法制度や経済状態の調査を目的とする総督府の臨時台湾旧慣調査会と、風俗・習慣調査を中心とする民間の台湾慣習研究会とによってすすめられたが、いずれも漢族系住民が対象であり、「山地」先住民に対する調査は激しい抵抗のために困難だったことが指摘される。その中で先住民調査の草分けである植民地官僚・伊能嘉矩の台湾人類学会を組織しての全島的調査に注目し、それが先住民との激しい緊張関係のもとでなされ、その緊張関係が調査の対象や方法を規定するものであったことを具体的に分析し、さらに伊能は先住民を人類学のあるいは進化論的な視点から8つの「種族」に分類したが、それは文化発展の度合いを測っての序列づけにはかならず、しかもひとび台湾館に展示されることによって先住民の表象が固定化され、分類のプロセスが隠蔽されたことを説く。

第4章「パビリオン学術人類館」では、場外余興の民間パビリオンとして、台湾先住民・アイヌ・沖縄・朝鮮・中国・インド等から集めた生身の人間を展示し、それが世間によびおこした議論をとりあげ、異人種として展示された沖縄人の抗議、「内地」世論の反応、そして人類館を指導した坪井正五郎の主張を詳しく分析し、抗議も人種差別主義を批判するより日本人との同化を求めるものであり、「内地」世論は文明人が博愛をそぐ視点からのものであり、人類学者坪井も人種主義を反省するのではなく、そうした人種分類の科学性をいかに高めるかに关心があったとする。

第5章「人類学と『展示』——人類学者、坪井正五郎の思想」では、人類館を支えた最高の権威ある人類学者・坪井正五郎の人類学会における位置、当時の人類学の性格、坪井の人類学の特質を明らかにしつつ、「人種」に関する彼の言説を読みとき、西洋からオリエンタリズムの対象として見出される日本人が、西洋の学知に影響されながら西洋のまなざしをはねかえそうとするところから生じる彼の矛盾を明らかにし、さらに彼が人類学の大衆化をはかろうとするときに、「混合種族」としての「日本種族」の優越性を語ることになり、それはまた日本帝国の版図の拡大に対応するものだったと論じる。

終章では、以上の議論をまとめた上で、「展示」という技法による「他者」の表象は、調査という知を不可欠としたが、伊能嘉矩の調査における問題性はさらに追求されるべきものであることを確認するとともに、この博覧会における「他者」表象を鏡として浮かび上がる「われわれ」(日本人)はどのようなまとまりをもったかと問い合わせ、「他者」との境界線の可変性こそが「日本帝国臣民」としてのアイデンティティの求心力を支えるものだと結論するとともに、そこにも矛盾が存したことを指摘する。

論文審査の結果の要旨

本論文は、第五回内国勧業博覧会における「他者」表象のありかたとそれを支えた知をとりあげ、そこにおけるナショナリズムの問題を明らかにしようとしたものである。ここにはさまざまな問題が含まれている。E・W・サイードのいうオリエンタリズムが日本においてどのように内面化していったかという日本のオリエンタリズムの問題、「他者」表象による自己認識がいかにナショナル・アイデンティティを構成するかという問題、調査－展示のプロセスにおける学問のありかたの問題、博物館という媒体がどのような政治性をもつかという問題等々、いずれも現今歴史学のみならず諸研究分野で論議されている重要な問題群が内包されている。本論文はこうしたことを自覚しながら、あくまで史料に依拠しつつ実証的に、それらの問題群に迫ろうとした労作である。

評価すべき点を具体的に挙げると、第一に、学界で論議になっているそれらの諸問題をとりあげて、新しい境地を

切り拓いた点が指摘できよう。本論文は、理論的にはサイードをはじめ姜尚中、富山一郎、吉見俊哉等々、多くの先学に負っていることはいうまでもないが、それらの成果を受けつぎながら、これまでの研究が思想家や新聞・雑誌の言説をもっぱら素材としてきたことに対して、物の展示のありかたを読みとる作業に正面からとりくんだことが評価できる。そうした作業を経ることによって、住民と調査者、調査と学知、学知と展示、展示する者とされる者と観る者など、展示をめぐる一連のプロセスの相互関係を初めて浮き彫りにすることことができたのであり、そこからまた、それらのプロセスにある諸矛盾を摘出し、たんに一方的なオリエンタリズムやナショナリズムの規範化過程として描くのではなく、立体的な構造として明示することができたのである。関係性を重視する態度は、貧民街強制撤去など都市問題と博覧会の問題とを結びつけている点にもうかがえる。博物館研究では吉見俊哉氏の幅広い視野に及ばないとても、帝国主義の問題を正面にすえた点と、立体的な構造を明示した点では吉見氏より奥深くとらえたといえよう。

第二に、こうした新境地の開拓が精力的な史料蒐集と実証とによって堅実に支えられているという点を挙げることができる。もちろん、史料蒐集の点では台湾での調査など今後に期待したい面があり完全とはいえないが、すくなくとも提起された問題に対して史料にもとづいて解いていくこうとする実証的な態度は、実証の手堅さとともに高く評価されるべきであろう。なかでも注目されるのは、伊能嘉矩の再発掘とでもいるべき作業である。伊能は最近見直されつつあるが、その出身地遠野での調査を通じて彼の訪台以前の構想を確かめることによって、伊能の調査の視点と方法のもつ問題点を明確に指摘することができた点は評価されよう。

第三に、以上のような作業によって、理論的にもいくつかの論点をつくりだしていることが挙げられる。その一つは、「他者」表象による「われわれ」と「他者」との境界線が可変的であったという指摘である。その点については、すでに富山一郎氏の沖縄人と日本人との分類をめぐる言説分析によって示唆されているが、本論文は台湾先住民、アイヌ、朝鮮人などの序列化と、開化による日本人への組み入れの問題を解いていて、ひろがった論点を提起している。また学知と展示との関係性を追究するなかで、学知の大衆化の問題、あるいは展示する側とされる側との関係性の問題を提起していることも注目されよう。

本論文は完成度の高いものであるが、不足がないわけではない。第一に、博覧会の「他者」表象として欧米やアジア諸国からの出品物を展示した参考館とカナダ館については、日本のオリエンタリズムを問題にする上からも、もっと触れるべきであったと思われるし、第二に、先行する欧米の万国博との関連も検討すべきではなかったかと思われる。第三に、坪井や伊能については、草創期における人類学の開拓者の意義をも考慮すべきではなかっただろうか。また大阪という都市の発展の脈絡の中に博覧会を位置づけることや、坪井と伊能との関係を追究することなど、残された課題も多いというべきであろう。しかしこれらの諸点のほとんどは、稿を改めて別の論文として展開することが望ましい。

以上の検討により、本論文が、博士（文学）の学位を受けるに十分な価値をもつことを認定する。